Hope Tree

【日本緩和医療学会第15回大会･発表演題】

がんを持つ親の子どもへの介入に関する実態調査

―医療関係者へのアンケート分析･その１　量的分析―

小林真理子[1)] 石田也寸志[2)] 茶園美香[3)] 小澤美和[2)] 井上実穂[4)]
大沢かおり[5)] 衛藤美穂[2)] 村田和恵[6)] 真部　淳[2)]

1) 国際医療福祉大学大学院　2) 聖路加国際病院　3) 慶應義塾大学看護医療学部
4) 独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター　5) 東京共済病院
6) 独立行政法人国立病院機構 埼玉病院

Hope Tree

研究の背景と目的

- 「がんを持つ親の子ども」は、親の病気のさまざまな局面（診断時、治療中、再発・転移が分かったとき、命の終わりが近いとき、亡くなったあと等）において、生活が変化し、重大なストレスを受ける。
- 現在日本では、成人のがん診療の現場で子どもの存在にまで配慮されることは少ないと思われる。
- そこで、「がんを持つ親の子どもへの介入（心理的支援）」について、

  ①がん医療に関わる医療関係者が、どのように介入しているのか、どのように考えているのか、という現状を把握する

  ②文化的背景を踏まえた子どもの支援を可能にするための資源作成の一助とする

  ために、アンケート調査を実施する。

HopeTree

調査方法

【対象と実施時期】

①2009年3月に開催された、子どものグリーフケアに関する講演会に参加した医療関係者。参加希望者に事前に郵送し、当日回収した。

②2009年6月に開催された、国立がんセンターがん対策情報センター主催相談支援センター相談員基礎研修会に参加した医療関係者。講演会当日に配布し、終了時に回収した。

【調査内容】 自己記入式アンケート調査

①がん患者の子どもに対する介入（心理的支援）についての考え方

②がん患者の子どもに対しての対応の実際

③介入して良かった経験についてなど

4件法と自由記述によって回答してもらった。

【分析方法】 IBM SPSS Statisitics Ver.18 を用いて統計分析を行った。

また自由記述に関しては、内容分析を行った。

【倫理的配慮】聖路加国際病院の倫理審査を受けて実施した。

結果1　対象者の属性

- 2009年3月回収 55名分、2009年6月回収 190名分
- 計245名（男性 30名、女性 211名、不明 4名）

＜職種＞

看護師 117名、MSW 90名、臨床心理士 12名、医師 8名

ﾁｬｲﾙﾄﾞ･ﾗｲﾌ･ｽﾍﾟｼｬﾘｽﾄ（CLS） 2名、その他 16名

＜年齢･経験年数＞

平均年齢 38.3歳（22-61歳、中央値38歳）

平均経験年数 12.6年（0-38年、中央値10年）

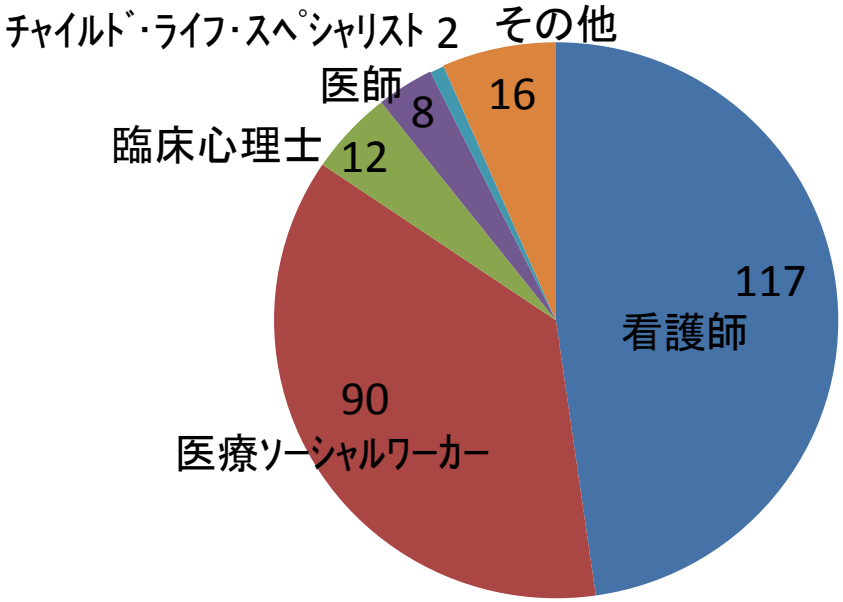
＜所属機関＞

がん診療連携拠点病院 110名、一般病院 78名

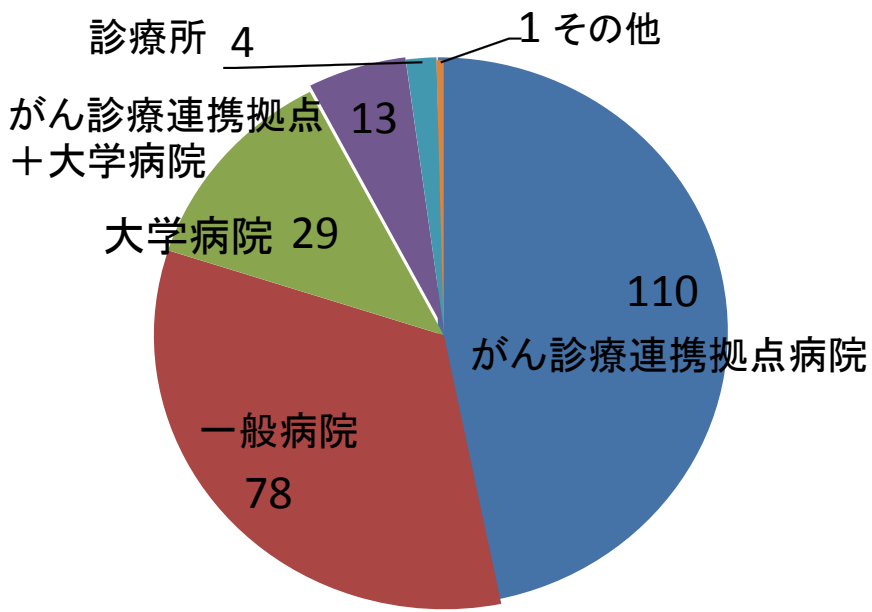
大学病院 29名、等

結果1 :対象者の属性

＜職種＞



＜所属機関＞



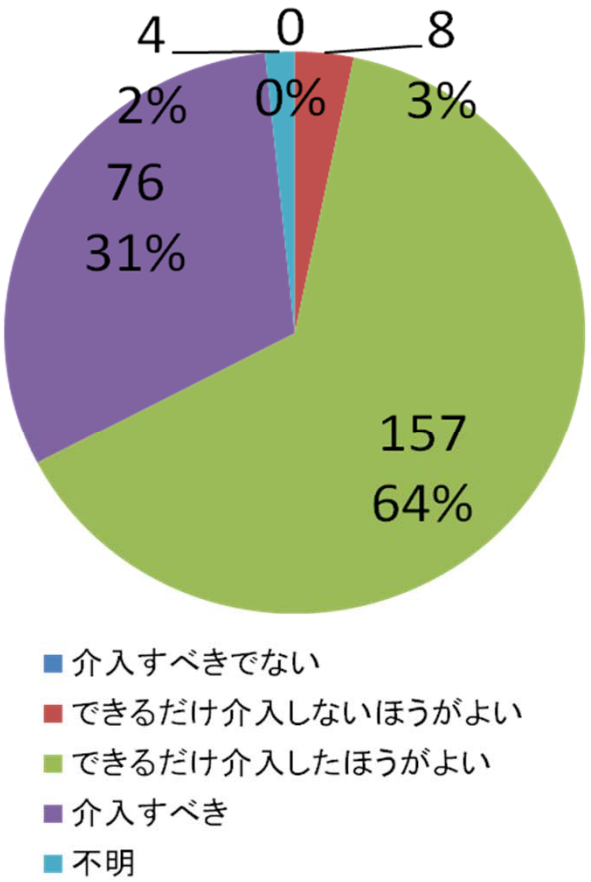
＜年齢･経験年数＞

平均年齢　　38.3歳（22-61歳、中央値38歳）

平均経験年数 12.6年（0-38年、中央値10年）

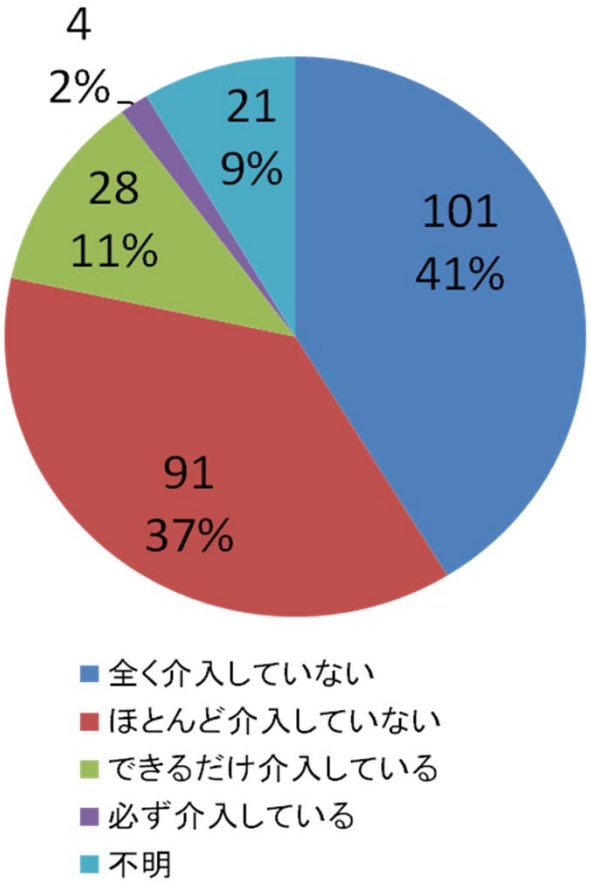
結果2

＜介入に関する考え＞



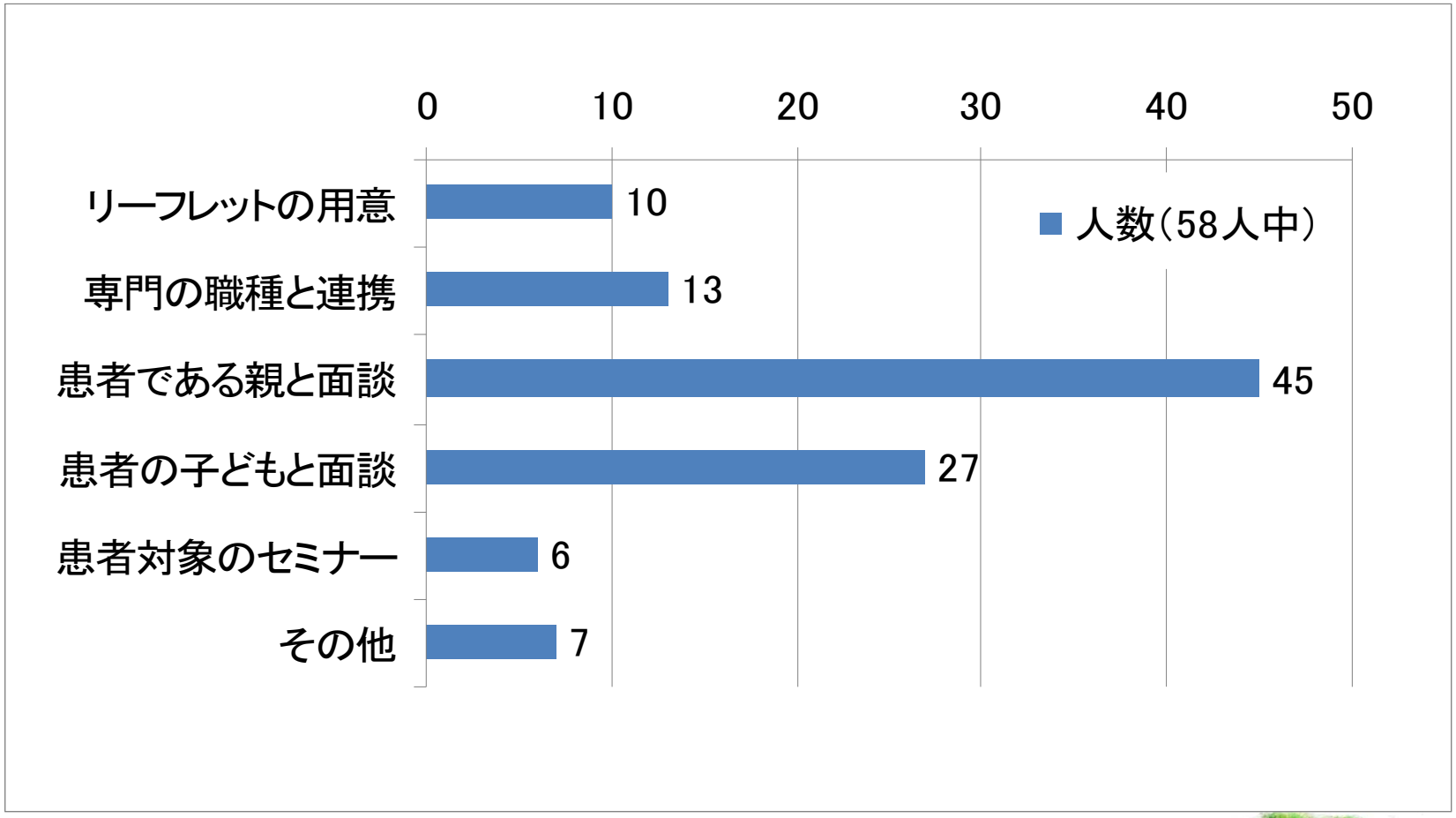
「1．がんになった親を持つ子どもへの介入（心理的な支援）について、現在、どのようにお考えですか。」

＜実際の介入経験＞



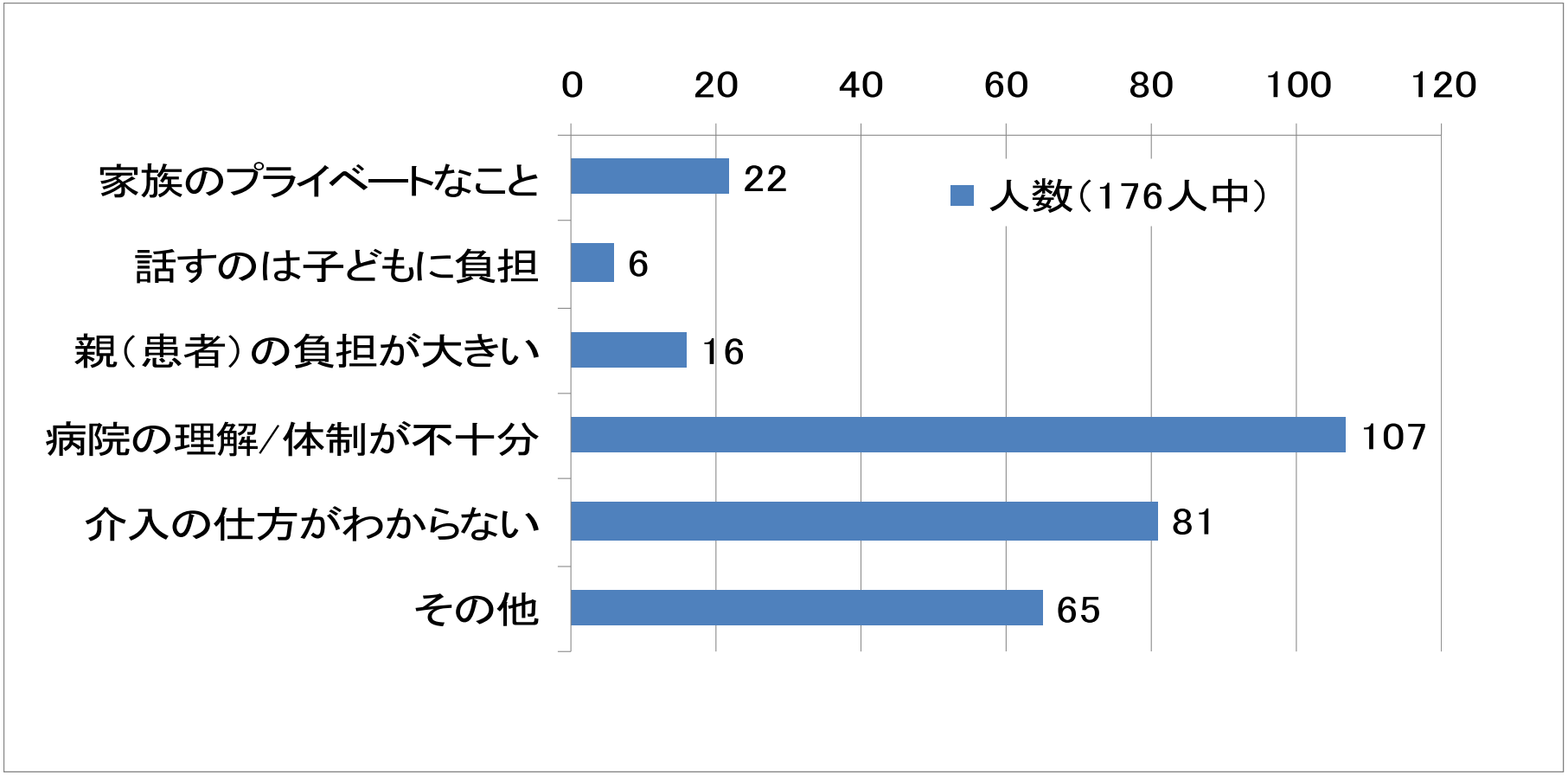
「2．実際の介入についてお尋ねします。」

結果３：実際に行った介入



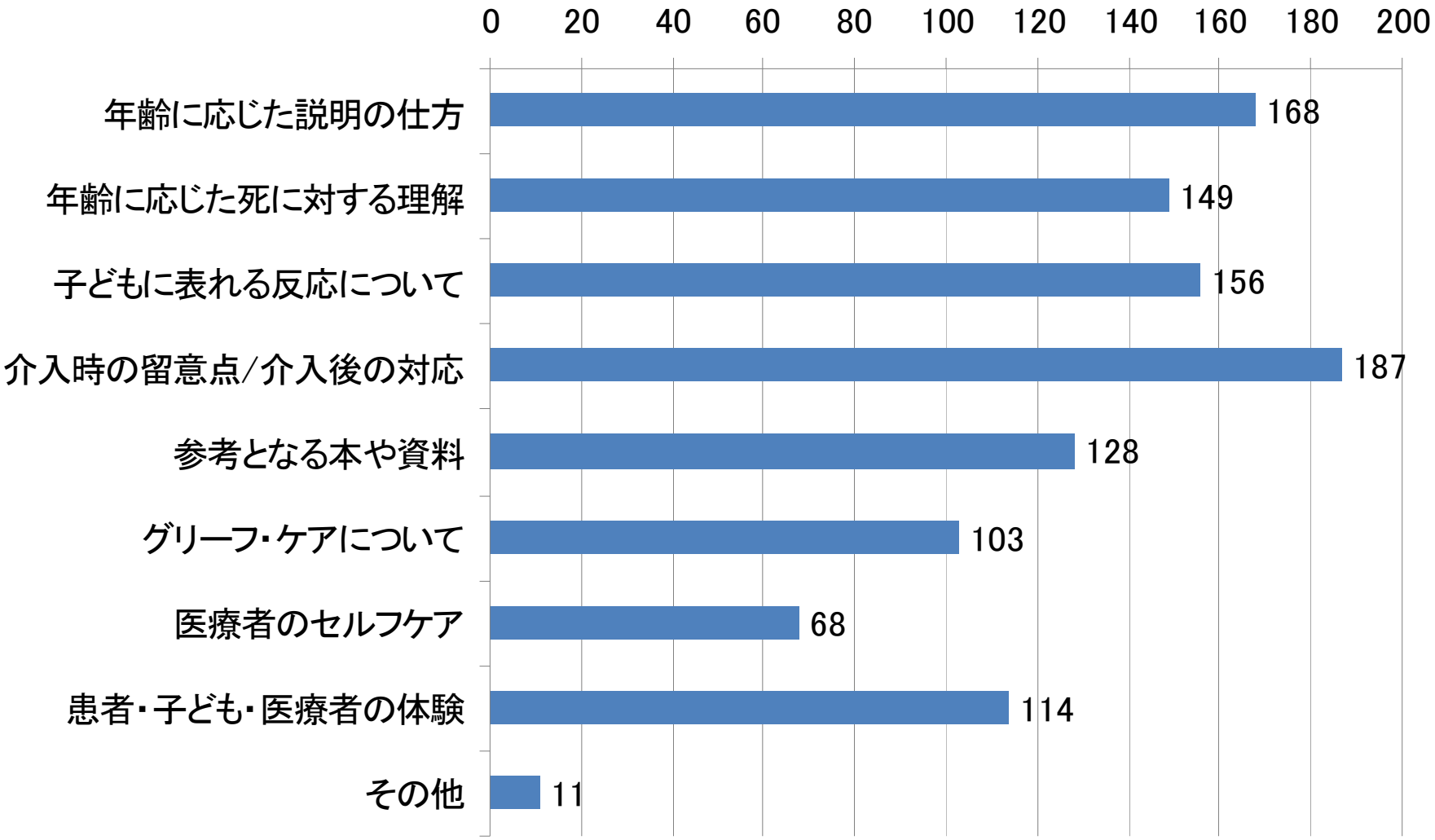
「３．実際に介入した方へお尋ねします。
どのような介入をなさいましたか。」（複数回答可）

結果4：介入していない理由



「6. 介入していない方にお尋ねします。
その理由はどのようなものでしょうか。」（複数回答可）

結果5：今後の参考になるもの



「7．今後、介入する際に、参考にしたい事柄や知っておきたい情報はどのようなことですか。」（複数回答可）

HopeTree

考察

- がん臨床に携わる医療関係者は、がんになった親を持つ子どもについて、何らかの心理的支援を含めた介入をすべきと考えているにもかかわらず、介入できていない現状が明らかになった。
- またそれは、がんを持つ親の子どもへの介入が、親（患者）や子どもの負担になるからという理由からではなく、現状では病院や病棟にまだそのような理解や体制が整っておらず、また医療者自身がどのように介入していいのか分からないという理由によるところが大きいことが分かった。
- これらの結果から、現状において、まずは医療関係者自身ががんを持つ親の子どもに介入する際に必要な知識や方法を学んでいくことが、支援への第一歩であり、そのための資源や機会の提供が必要であることが理解された。

Hope Tree

結語

1. 「がんを持つ親の子どもへの介入」について、医療関係者にアンケート調査を行った。
2. 245名分を回収（看護師、医療ソーシャルワーカーが約8割）し、量的解析を行った。
3. 成人医療現場での子どもへの介入は、必要と感じながらも実践されていない現状であった。
4. 理由は、医療者側の理解・体制が不良であること、知識の不足によるところが大きかった。
5. 今後、医療者への啓蒙、情報提供が必要であると考えられた。

本調査研究は下記の研究費助成を受けて実施いたしました。

＊平成20年度 厚生労働省科学研究費補助金（がん臨床研究事業）「働き盛りや子育て世代のがん患者やがん経験者、小児がんの患者を持つ家族の支援のあり方についての研究」（研究代表者：真部淳）

＊平成21年度笹川医学医療研究財団・ホスピス緩和ケアにおけるQOLの向上に関する研究助成（Hope Treeがんになった親を持つ子どもへの支援研究グループ）